

タイトル	カンポンのフリーター：マレーシア・トレンガヌ州 ゴンバライ村の生業と若者の職業選択
著者	須田，一弘
引用	北海学園大学人文論集，19：113-138
発行日	2001-07-31

カンポンのフリーター

—— マレーシア・トレンガヌ州ゴンバイ村の生業と若者の職業選択 ——

須 田 一 弘

1. はじめに

経済のグローバル化が進んでいる現在、かつて人類学が研究対象としてきた世界経済の周縁部にもその影響は顕著となり、地球上のさまざまな地域において社会が大きく変化を遂げている。社会変化に直面した社会において諸個人が取りうる対応は、状況の変化に対する機械的な反応ではないし、また、当該社会の文脈をはなれたまったく自由な選択でもない。諸個人は、社会がおかれた状況に身をおきながらも、したたかに選択をおこなっているのである。人類学のみならず社会科学の多くの分野は、こうした社会変化を取り上げ、さまざまな分析を積極的に試みてはいるものの、そこに生きる諸個人の具体的な生活のレベルに焦点をあてた視点が十分に生かされてきたとはいえない。

ところで、生態人類学は、環境の危機的状況への個人の対応に焦点をあてて環境と人間関係を明らかにすることを主要なテーマとしてきた (Vayda and MacCay, 1975)。その際、生活をおびやかすような環境問題に直面した時に、個人や社会がそれに対処する柔軟性を有しているかどうか、人間と環境の関わりを考えるうえで重要な指標となってきた。このアプローチは、初期の生態人類学が人間と環境の均衡的な関わりを過度に強調したことにより、社会変化のプロセスを見落としていたことへの反省から出発したといってもよい (Lees and Bates, 1990)。

しかし、社会変化は環境問題だけによって生ずるわけではない (須田, 1995)。現在のように、経済がグローバル化し多かれ少なかれ世界中の人び

との生活に影響を与えている状況の中では、それぞれの社会で生じる、経済活動も含めたさまざまな出来事を当該社会の文脈に即して分析していく必要がある。そして、社会的文化的要因を含めた環境の変化に対して、各個人が複数の適応戦略、すなわち「資源を獲得し利用するために、あるいは直面する問題を解決するために考案した、個々の調整 (adjustment) からなる一連のパターン」(Bennet, 1969: 14)の中から1つを選択し、それらの適応戦略が普及し、あるいは放棄されるというプロセスを考察することによって、変化のダイナミクスを理解することが期待できるのである。本稿では、このような視座に立ちながら、社会の変化と個人の選択を考えるために、経済開発のただなかにあるマレーシア・トレンガヌ州の1半農半漁村において若者が経済活動に参入する際の選択を分析することにする。

1980年代半ば以降、マレーシアはNIESの一員として急激な経済成長をとげてきた。マレーシアの経済開発は、あたかも1960年代の日本の高度経済成長に比べられるような規模で進んできたといってもよいかもしれない。クアラルンプールをはじめとする都市部での雇用機会の増大は、農村部の若者を都市へとひきつけ、人口の流動化をうながすこととなった。経済開発下のクアラルンプールとその近郊では、流入する人口に住宅建設が追いつかず、流入した人びとが公有地や私有地を不法に占拠し集落を形成する、いわゆるスクォッターが問題となっている。そして1980年代半ばからは、外国人労働者の流入がスクォッター問題をより深刻なものにしているという(藤巻, 2000)。

マレーシアのこうした状況は、日本が高度経済成長期に経験した農村から都市への人口の流入と、それに伴う都市部の過密化、農村部の過疎化をもたらしたのだろうか(Suda, *et al.*, 1988)。たしかにクアラルンプールとその周辺の首都圏地域は1990年代になってから交通網が整備され、人口が集中してはいる。生田と松澤等はクアラルンプールとその周辺地域の経済開発について詳細な論考を加えている(生田, 松澤編, 2000)。

それでは、こうした都市への人口の流入の一方で、農村部ではどのよう

な状況が進行しているのだろうか。この問題を、とくにマレー人としての伝統的生活を色こく残している半島東海岸の集落（*kampung*：カンポン）の事例を通して考えてみたい。本稿では上記の視座に立脚し、マレーシアの経済開発が個人の行動にどのような影響を与えているのか、また、個人の行動や選択がどのような文化的背景にもとづいて成り立っているのかを、若者の職業選択に焦点をあてて考察してゆく。

2. 調査地の概要

半島マレーシア東海岸のクランタン州やトレンガヌ州のカンポンは、ほぼ100%近くがマレー人で構成されており、イスラム教の影響が強い地域である。また、トレンガヌ州の沖合いでは1980年代から海底油田と天然ガスの開発がおこなわれ、海岸部には原油やガスの精製や貯蔵、加工のための施設が次々と建設され、急激な経済開発を経験しているところでもある。本稿ではトレンガヌ州沿岸部の小さなカンポンであるゴン・バライ（*Gong Balai*）村の事例に基づいて、上記の問題を考えていきたい。

調査対象のゴン・バライ村は、半島マレーシア、トレンガヌ州の州都クアラトレンガヌから南へ40 kmほどの南シナ海沿岸に位置する半農半漁の小さな集落である。集落の住居は、パハン州の州都クアンタンとクアラトレンガヌを結ぶ国道沿いに建てられている。国道の交通量は多く、クアンタンやクアラルンプールとクアラトレンガヌを結ぶバスやトラックが頻繁に行き交う。国道を南にさらに約40 km下ると、トレンガヌ州中央部の中心都市ドゥングン（*Dungun*）がある。ゴン・バライ村はクアラトレンガヌとドゥングンのちょうど中間地点に位置しており、両都市への通勤圏内にかろうじて含まれている。

行政的にいえば、ゴン・バライ村はゴン・バライとカンポン・バル（*kampung Baru*）、タナ・ロッ（*Tana Lot*）、トッ・ファケイ（*Tok Fakir*）、アロウ・テンブス（*Alor Tembesu*）の5つの自然村（カンポン：*kampung*）から成るが、マレーシアの他の行政村同様、この5つの自然村の間にそれ

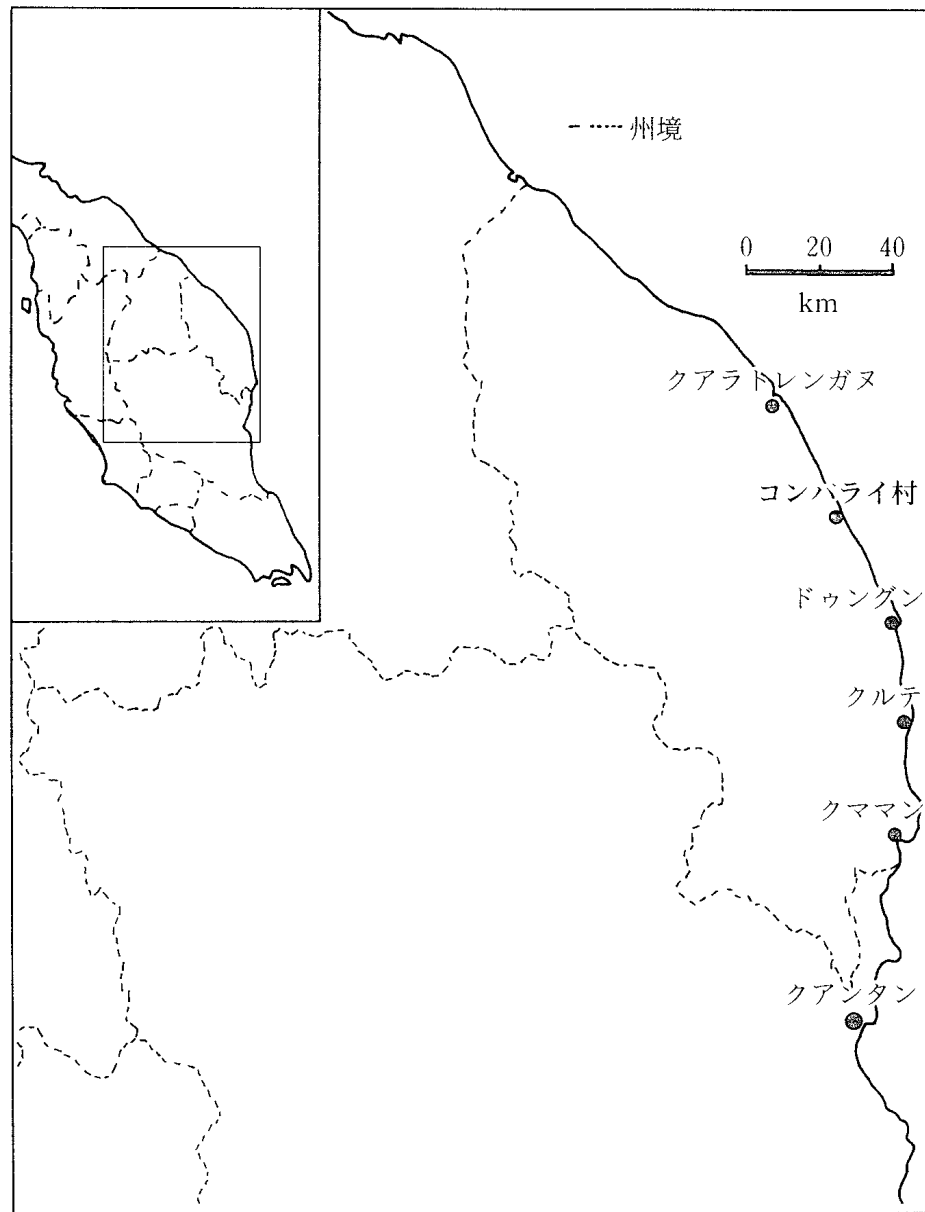


図1 調査地

ほどまとまりがあるわけではない。ただし、カンポン・バル（新しい村という意味のマレー語）は自然村ゴン・バライの分村であり、共通のモスクを利用している。また、この2つのカンポンは他の3つのカンポンとは Mercang 川で隔てられており、歴史的にも地理的にも密接なつながりを持っている。そこで、本稿では、行政村ゴン・バライのうちのゴン・バライとカンポン・バルの2つのカンポンを調査対象とした。これ以降、ゴン・バライという場合には、特にことわりがなければこの2つのカンポンをさすものとする。

表1 Gong Balai 及び Kangpong Baru の人口とその構成
(1998 年 8 月 1 日現在)

年齢	男	女
～15	68	59
16～30	30	26
31～45	27	29
46～60	22	29
61～	14	18
合 計	161	161

1998 年のゴン・バライの人口は 322 人である（表 1）。主たる生業は後述のように漁業と農業である。かつての集落は今より内陸に位置し、水田耕作が生業の中心であった。しかし、隣国タイから安価で高品質の米が輸入されるようになり、水田耕作は徐々に行われなくなった。ここ 20 年ほどはゴン・バライおよびその周辺では稲作はまったく行われていない。ゴン・バライには農業や漁業の他、クアラトレンガヌやドゥングンに勤める会社員や公務員も少なからず住んでおり、また、村人を対象として商店を営んでいるものもある。

3. ゴン・バライの生業

ゴン・バライの若者の職業選択を考察する前に、従来からゴン・バライの中心生業であった漁業と農業について、簡単にまとめてみる。現在、近郊の地域で新たな経済開発が行われて、若者の職業選択に大きな影響を与えてはいる。しかしながら、従来の生業は職業選択の際の単なる 1 つの選択肢というだけではなく、新たな経済開発同様、その選択に大きな影響を与えていると考えられるからである。

1) 漁 業

ゴン・バライ周辺には、動力船を繋留して置くための港湾施設がない。漁業に使用する船の多くは船外機付きのグラスファイバー製のボートで、

砂浜に引き上げて保管している。他に、後述の巻網や籠漁を行うための動力船が数隻あるが、それらは海岸から20～30 mほどの沖に錨で繋留し、手こぎのボートを使って乗り込んでいる。

ゴン・バライで行われている漁種は、エビ刺網、一本釣り、イカ釣り、籠漁 (*bubu*)、巻網漁の5種であり(図2)、巻網漁を除けば、他の漁はいずれも1～2名で操業される、きわめて小規模な漁業である。ただし、巻網漁は1993年からは操業されていない。また、モンスーンの影響を受ける11月から3月までは波浪が強いためどの漁種も操業されない。その間は、港湾設備の整ったドゥングンから出港するエビトロール漁船に乗り込むものもある。

一本釣り漁といか釣り漁、及び巻網漁では、ウンジャン(*ungjung*)と呼ばれる、ココナツの葉を6～7枚ほど結び合わせた仕掛けを海中に敷設し、そこに集まる獲物を捕獲している。釣り漁の場合には、ウンジャンを1人が5基ほど設置し、それぞれ目印をつけた自分のウンジャンを利用する。これに対し、巻網のウンジャンには所有権は設定されておらず、誰でも自由に利用することができる。なお、ウンジャンの耐用年数はおおよそ1年程度である。また、籠漁では、餌を入れた竹製あるいは金属製の籠(*bubu*)を1人が50個ほど設置し、出漁ごとに籠を引き上げ獲物を捕獲する。一本釣りや籠漁の漁獲対象はアジ科の魚やアマダイなどである。また、エビ刺網ではおもにブラックタイガーが漁獲される。

1993年まで行われていた巻網漁はゴン・バライでは3隻の動力船で10数名の乗組員によって操業される、比較的大規模な漁であった。小型

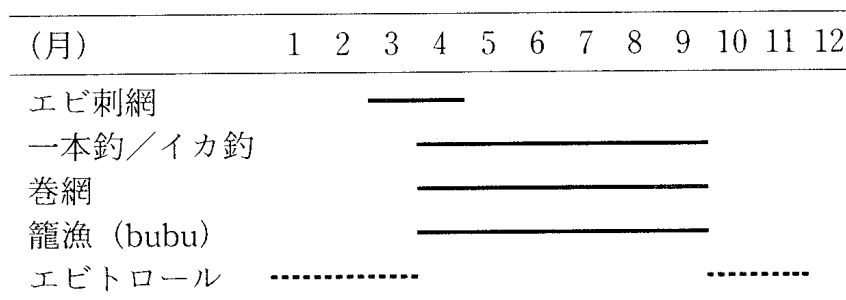


図2 漁種と漁期

ボートや動力船を所有していない若者は、巻網漁に参加することによって収入を得ることが可能になっていた。以下では、巻網漁の操業形態について簡単に紹介したい。

〈巻網漁〉

巻網漁は探索船と網船、母船の3隻で操業される。3隻は早朝まだ暗い6時頃に海岸を出発する。比較的小型の探索船は沖合いのウンジャンをいくつも見回り、マナガツオなどの獲物の集まり具合を調べる。充分な量の魚群を見つけるとすぐに網船に合図する。網船は母船の指示に従って投網し、魚群を囲繞する。囲繞が完了すると、網船の乗組員が網を引き上げて作業は完了する。時間に余裕があればこの作業を再び繰り返すが、遅くとも午後4時頃には村に帰り、漁獲物を仲買人へと卸す。乗組員はいつも固定されているのではなく、その日の朝に海岸に集まった者で構成される。乗組員が集まらないときには、家々を回り乗組員を確保してから出発する。

表2は1991年9月に操業された巻網漁の参加者とその分配金をまとめたものである。参加者は網主から恒常的に乗組員と認められた者（A-1からKまでの14名）と、人手が足りず臨時に参加した者（LからRまでの7名）に大別される。ここで分配方法を簡単に紹介すると、売上から燃料代や氷代などの経費を差し引いた利益のうち、およそ半分を網と船で折半する。この時の利益は2,307リングットで（1991年の調査時には1リングット＝約50円で、その後数年はほぼこの水準で推移したが、90年代後半の通貨危機により為替レートが変動し、1998年には約30円まで落ち込んだ）あり、そのうち1,000リングットが網と船の分配金とされ、その半分の500リングットを網の所有者が受け取り、残りの500リングットを小型船（探索船）1に対し大型船（網船と母船）2の割合で分配した。従って、探索船の所有者は100リングット、網船と母船の所有者は200リングットずつを受け取った。網主と母船の所有者は同一人物（A-1）なので、合計700リングットを受け取った。

乗組員の分配金は基本的には均等割りで、およそ1ヶ月ごとに支払われ

表2 Pukat Cerut (二艘曳き巻き網) の操業状況

(1991年9月3～30日)

出漁日	3	4	5	7	10	11	12	14	15	16	17	29	30		Gaji	船網	収入 合計
Cemmau (RM)	5	10	10	—	10	10	—	5	—	3	—	—	—	合計	(RM)	(RM)	(RM)
A-1 ¹⁾	○	○	○	○		○	○	○		○	○			43	37	700	780
A-2 ³⁾	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	53	57		110
A-3 ³⁾		○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	48	57		105
B-1 ²⁾	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	53	57	200	310
B-2 ³⁾	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	53	57		110
C	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	50	57		107
D	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	53	40		93
E ²⁾	○	○	○	○	○	○	○			○	○			48	57	100	205
F	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○			48	40		88
G	○	○	○	○		○	○	○	○					40	57		97
H ³⁾	○	○	○		○	○	○	○	○		○			50	57		107
I ³⁾		○	○		○	○					○			40	40		80
J	○	○	○	○										25	40		65
K	○		○	○										15	30		45
L ³⁾								○					○	5			5
M				○													
N ³⁾												○	○				
O ³⁾												○					
P ³⁾													○				
Q ³⁾													○				
R ³⁾													○				
Total	12	13	14	13	10	12	11	10	9	8	10	7	11	624	683	1000	2307

1)：船，網の所有者

2)：船の所有者

3)：独身者

るが，1日の売上がある程度多くなった場合には，日払いの手当てチェンマウ(*cemmau*)が支払われる。例えば，9月3日には5リングットずつがその日の参加者に支払われた。さらに，1ヶ月ごとに残りの分配金(ガジ；*gaji*)が，参加した日数に応じて支払われる。ただし，ガジを支払われるの

は恒常的な乗組員に限られており、臨時の乗組員はチェンマウと魚の現物が操業終了時に渡されるのみである。網主や船主も乗組員として漁に参加すれば、他の乗組員と同様にチェンマウやガジを受け取ることができる。1991年の9月に網主兼母船の所有者であるA-1が巻網漁から受け取った金額は合計780リングットであり、網船の所有者のB-1は310リングットを、探索船の所有者のEは205リングットをそれぞれ受け取った。これに対し、恒常的乗組員は参加日数に応じて45リングットから110リングットを受け取ったが、臨時の乗組員はLだけがチェンマウの5リングットを受け取り、それ以外の者は獲物を現物で受け取ったにすぎない。

〈時間利用〉

ゴン・バライの漁家世帯は漁業を専業としているのではない。いずれの世帯も、農業や賃労働にも従事している。これは、前述のように、ゴン・バライ周辺の自然環境の制限により、通年操業が不可能になっていることが大きく影響している。そのため、漁家世帯の多くは漁業への投資を抑え、船外機付きの小型ボートによる操業を中心としているのである。また、1994年には、ゴン・バライで唯一おおがかりに操業していた巻網漁も、他の大型漁業との競合による漁獲減と網主の病気（糖尿病）のため網と船を手放し、操業を取りやめた。

表3は、タイムセービング・スポットチェック法（Moji and Koyama, 1985; Suda, 1994）により、1991年9月14日から19日の午前7時から午後7時までの12時間について、漁家世帯の成人メンバーの時間利用を調べたものである。男性の場合、日中の約4割の時間が漁労活動に費やされているが、その他にも13.5%が農作業に、6.3%が大工仕事にそれぞれ費やされている。女性はイスラム教により活動が制限されており、漁労活動への参加が船の上げ下ろしの手伝いなどに限定されるため、男性にくらべると漁労活動に費やされる時間が極端に少なくなっている。しかし、農作業には男性より多い18.9%の時間が費やされており、世帯内で性による分業が行われていることをうかがわせる。

表 3 男女別時間利用

(7:00~19:00 1991 年 9 月 14~19 日)

活動	男性	女性
(%)	n=29	n=26
漁業	39.9	3.2
農業	13.5	18.9
家畜飼養	1.1	1.9
建築作業	6.3	1.0
家事	0.3	7.1
育児	0.0	4.8
調理	0.3	14.7
食事	3.2	3.5
衛生	2.0	1.9
訪問	7.2	10.3
宗教活動	0.9	1.0
休息	23.0	31.1
その他	2.3	0.6

2) 農 業

ゴン・バライの農業はかつては二期作の水田耕作が中心であったが、前述のようにここ 20 年以上は作付けはなく、ほとんどが畑作に転換されている。その他にはゴムやタバコ、ココナツなどが耕作され、また、家畜も飼養されている。以下ではそれぞれの特徴について簡単に紹介する。なお、表 4 から 7 に、漁家世帯、農家世帯、賃金労働者世帯、老年世帯のそれぞれについて、土地台帳をもとに各種類ごとの耕地面積と所有する家畜の数をまとめた。各表中の水田の欄はかつて水田として利用されていた土地の面積であり、現在は畑地、または休耕地になっている。また、各表の備考欄には、世帯主および世帯メンバーの農・漁業以外の職業を書き入れた。

〈ゴ ム〉

今から 30 年程前に希望者が政府から購入資金を借り受けて、基本的には 1 世帯 6 エーカーずつのゴム園を開いた。現在、20 世帯が合計 117.5 エーカーのゴム園を所有している。1 エーカーにおよそ 200 本のゴムを植え付

け、午前と午後の2回、樹液を採取する。樹液の採取は一般に本人または家族が行うが、他の仕事との兼ね合いで、人を雇う場合もある。1ヶ月に
 およそ800～1,000 リンギットの収入を得ることができるが、人を雇った場
 合には、売上金は折半する。11月と12月は風雨が強いいため樹液の採取は行
 われない。

〈タバコ〉

タバコの栽培は10年程前から政府の事業として始まった。政府は海岸か

表4 漁家世帯の操業漁種、耕地面積及び家畜数

世帯 番号	生産年齢 人口 男 女	非生産年齢 人口 男 女	操 業 漁種*	水田 (A)	ココ ナツ (A)	ゴム (A)	野菜 畑 (A)	ニワ トリ (羽)	ウシ (頭)	備 考
101	1 1	1 1	A	1.50	0	6.0	0	0	0	商店経営
102	1 1	1 1	A,D	0	0	0	0	0	0	大工兼業
103	2 1	1 2	A,D	1.25	1.00	6 0	0	5	4	商店
104	3 2	0 0	A,D	4.50	0.25	6.0	0	500	0	
105	1 1	0 0	A,B	2 50	2 00	6.0	0	17	9	
106	1 1	0 0	A,B	0	0.50	0	0	5	0	
107	1 2	0 1	A,B	1.00	0.25	6.0	0	0	0	娘：教師
108	1 2	0 0	A,D	4.00	3.00	12.5	0	0	17	
109	2 1	4 0	A,B	1.00	0	0	2.00	3	2	
110	1 1	0 1	A,B	3.00	1 00	6.0	2.00	10	2	
111	1 1	0 0	A,B	5.00	0	6.0	5.50	0	0	商店経営
112	1 3	0 1	A,C	1.00	1.75	0	0	30	2	
113	2 1	1 0	A,B	2.00	3.00	0	0.50	15	2	
114	2 1	0 0	A,B	2.50	1 75	0	0	0	0	
115	1 1	1 1	A,B	2.00	1.75	0	1 75	6	3	
116	1 1	0 0	A,B	2.50	1.75	0	0	15	2	
117	1 1	1 0	A,B	0	0	0	0	0	0	
118	3 2	3 2	A,B	0.50	2 00	0	0	0	0	タバコプロジェクト
119	2 1	2 1	A,B	2.75	2.00	0	0	2	1	息子：大工
120	2 2	1 1	A,B	2.00	2.00	0	1.00	20	2	
121	1 2	1 1	A,B	1.50	2.00	0	0.50	10	0	
122	1 1	2 2	A,B	1.75	0.75	0	0	10	0	
123	1 1	2 3	A,C	0	0	0	0	0	0	
124	1 2	1 1	A,C	0	0	0	0	0	0	
平均				1.76	1.11	2.27	0.55	27	1.92	
分散				1.42	1.01	3.52	1.24	101	3.80	
保有率 (%)				79.2	70.8	33.3	29.2	58.3	45.8	

*：A：エビ刺網，B：一本釣り／イカ釣り，C：籠漁，D：巻網

ら 4～5 km 内陸に入った国有地を，1 戸あたり 4 エーカーずつ安価で貸し付けた(1 年あたり 100 リンギット)。栽培は 2 エーカーずつ植付け時期をずらし，収穫作業がかさならないようにしている。植付けの後，およそ 3 ヶ月で収穫可能となる。3 週間ほどのうちに 5 回の収穫が行われ，葉を蒸し上げた後，乾燥させて出荷する。収穫や加工には人手がかかり，通常は家族以外に作業員を何人か雇わなければならない。1 エーカーにつき約 40,000 リンギットの売上があるが，経費は人件費を含め売上のおよそ半分を占める。タバコの栽培は時間的には年に 2 回可能だが，地力保持のため年 1 回の植付けとし，裏作にトウモロコシを作付けすることが多い。トウモロコシ栽培では，1 エーカーで 4,000～6,000 リンギットの売上がある。

表 5 農家世帯の耕地面積及び家畜数

世帯 番号	生産年齢 人口 男 女	非生産年齢 人口 男 女	水田 (A)	ココ ナツ (A)	ゴム (A)	野菜 畑 (A)	ニワ トリ (羽)	ウシ (頭)	備 考
201	2 2	1 0	2 25	2.00	0	0	5	8	息子：大工
202	1 2	0 0	2.00	0 75	0	0	12	0	娘：子守
203	2 1	2 0	0.75	0	0	0	3	1 ¹⁾	
204	1 1	1 1	1.50	1 50	8.0	0	10	5	
205	1 1	2 2	2.00	0	6 0 ²⁾	0	0	0	
206	2 2	0 0	1 50	0	6 0	0	0	0	息子：大工，娘：教師
207	1 1	1 2	1 00	0	6 0	0	0	0	
208	2 1	0 0	2 25	0 25	6 0	0	0	0	息子：大工
209	4 0	1 1	5.75	0 75	0	1 00	10	6	息子，孫：大工
210	1 2	0 0	1 00	0.25	6.0	0	0	0	息子：会社員
211	2 3	0 0	1 50	2.00	8 0 ²⁾	0	2	4 ¹⁾	息子：大工，娘：子守
212	2 1	0 0	2 00	0	0	0	0	4	
213	1 1	0 0	3.00	3 00	3.0	0	0	4	
214	1 1	2 2	2 00	1.00	6.0	2.50	10	3	息子：大工
215	1 1	0 1	1 00	0	0	1 00	0	0	
216	1 2	2 1	4 00	3 25	0	0	10	0	タバコプロジェクト，娘：店員
平均			2.09	0 92	3.44	0 28	3.88	2.19	
分散			1.27	1 11	3 31	0 68	4 77	2.66	
保有率 (%)			100	62 5	56 3	18.8	50 0	50.0	

1)：ヤギ

2)：借地

〈野 菜〉

主としてトウガラシ、ナスビなどが栽培されている。いずれも植付けから収穫まで3ヶ月ほどかかる。一般には2～3月に植付けし、5月頃から収穫をおこなう。トウガラシもナスビも次から次へと実をつけるため、収穫は1週間に2～3回ほど行われ、10～11月まで続く。作業はその他に除草剤や殺虫剤の散布があり、1回につき2～3時間程度、週に1～2度行われる。収穫作業は朝8時頃から正午前後まで行われ、選別の後、集荷に来た仲買人に出荷される。仲買人は収穫物を主にクアラトレンガヌの公設マーケットで販売する。1エーカーにつき1ヶ月で1,600～2,000 リンギッ

表6 賃金労働者の耕地面積及び家畜数

世帯 番号	生産年齢 人口 男 女	非生産年齢 人口 男 女	水田 (A)	ココ ナツ (A)	ゴム (A)	野菜 畑 (A)	ニワ トリ (羽)	ウシ (頭)	備 考
301	1 1	0 2	1.50	0	0	0	0	0	大工
302	1 1	2 2	0	0	0	0	0	0	用務員
303	1 1	1 1	0	0	0	0	0	0	会社員（材木関係）
304	1 1	3 3	0	0	0	0	0	0	商人
305	1 1	0 0	0	0	0	0	0	0	会社員（石油関係）
306	1 1	1 2	3.35	2.00	5.0	0	6	0	公務員、妻：教師
307	1 1	0 1	0	0	0	0	0	0	運転手、妻：教師
308	1 1	2 2	0	0	0	0	0	0	大工
309	1 1	2 4	0	0	0	0	0	0	商人
310	3 1	0 0	0	0	0	0	0	0	商人、息子：大工、娘：店員
311	1 1	2 1	0	0	0	0	0	0	大工
312	2 1	0 2	0	0	0	0	0	0	大工、息子：大工
313	1 1	3 3	0	0	0	0	0	0	大工
314	1 1	5 0	1.50	1.50	0	0	0	0	運転手
315	1 1	2 1	0	0	0	0	0	0	教師
316	0 1	0 0	1.75	1.50	0	0	20	0	商人
317	1 0	0 1	1.00	0	0	0	0	0	大工
318	1 1	0 0	0	0	0	0	0	0	不明
319	1 1	0 3	0	0	0	0	0	0	大工
320	2 1	0 2	2.00	2.00	0	0	15	2	商人
321	1 1	3 0	0	0	0	0	0	0	大工
322	1 1	5 1	0	0	0	0	0	0	不明
323	1 1	3 1	0	0	0	0	0	0	不明
平均			0.48	0.30	0.22	0	1.78	0.09	
分散			0.92	0.69	1.04	0	5.17	0.42	
保有率 (%)			26.1	17.4	4.3	0	13.0	4.3	

トの売上有る。

〈ココナツ〉

海岸に近い砂地には、住居の他、数多くのココナツが植えられている。ココナツの実には青いものがそのまま飲用とされたり調理に利用される他、熟したものは1個25～50セントで出荷される。ココナツの栽培には、植付けの他にはまったく手がかからないが、出荷のために自分で収穫することではなく、ブタオザルを飼い慣らしたココナツ収穫者を雇って行われる。収穫者はサルを器用に操り、次から次へと実を落としていく。収穫者には1個10セントの手数料が支払われる。場合によっては、1エーカーにつき1年で4,000～5,000リングットの売上になることもある。

〈家畜飼養〉

イスラム教徒であるゴン・バライの村人が飼養している家畜は、ウシ、水牛、ニワトリ、ヤギ、ヒツジなど、イスラム教で食用として許されているものに限定されている。基本的にはすべて放し飼いにされ、住居敷地内部には夕方囲い込まれるだけである。いずれの家畜も定期的に販売されるのではなく、結婚式の宴会やイスラム教の儀礼時に食用として屠殺される他、

表7 高齢者世帯の耕地面積及び家畜数

世帯 番号	生産年齢 人口 男 女	非生産年齢 人口 男 女	水田 (A)	ココ ナツ (A)	ゴム (A)	野菜 畑 (A)	ニワ トリ (羽)	ウシ (頭)	備 考
401	0 0	1 0	0	0	0	0	0	0	息子：農民
402	0 0	1 1	1.50	1.25	6 0	1.00	0	0	
403	1 1	1 0	2 00	3 00	0	1.00	15	2	
404	0 0	0 1	0	0	0	0	0	0	
405	0 0	0 1	0	0	0	0	0	0	
406	1 0	0 1	0	1.00	6.0	1.00	5	0	
407	0 0	0 1	0	0	0	0	0	0	
平均			0.50	0.75	1.71	0.43	2.86	0.29	
分散			0.83	1 13	2 93	0.53	5.67	0.76	
保有率 (%)			28.6	42.9	28 6	42 9	28.6	14.3	

急な入用があった際に販売し現金を得るために飼われている。ウシや水牛は、雄が800～1,000リングット、雌が500～800リングット、子供が200～300リングットで販売される。ヤギやヒツジは雄雌とも100リングット、ニワトリは1kg3リングットで売られる。

3) 生業構造

前述の漁業と農業は、ゴン・バライ村の若者が経済活動に参入する際の基本的かつ重要な選択肢の1つである。しかし、漁業と農業は必ずしもいずれか一方のみを選択しなければならないわけではない。いくつかの世帯では両方を兼業する場合もあるし、時間配分を工夫することにより同一人物が漁業と農業の双方に従事することも可能である。

ゴン・バライは半農半漁の村である。そして、それは農業を主とするものと漁業を主とするものが明確に区別されているのではなく、農業を中心に行っている世帯と、漁業と農業を兼業する世帯が混在していることを意味している。これは漁業を通年にわたり操業し、それを専業とすることが困難であることによっている。また、表4と表5をくらべてみても、農家世帯と漁家世帯で耕地面積がそれほど違っているわけではないことがわかる。両者の違いは、漁業へコミットメントするかどうかということにかかっている。

漁業へのコミットメントの有無は比較的明確で、漁船や漁具を所有しているかどうかということによっている。船外機つき小型船で釣り漁やエビ刺網を操業する場合には、500～700リングットのグラスファイバー製ボートと、およそ1,000リングットの船外機を購入することになる。また、少し大きめの動力船を購入する場合には、中古で10,000～40,000リングットかかる。巻網を購入するには、さらに15,000リングットを投資しなければならない。籠漁の籠を50個ほど用意するには、4,000リングットが必要になる。つまり、ゴン・バライにおける生業の特徴をまとめると、漁家世帯は農業に加えて漁業へも投資し、収入の向上を目指しているということが出来よう。

それでは、若者は、村内における経済活動の基本的選択肢である漁業と農業に加え、いかなる経済資源を考慮に入れながら、具体的な職業選択を行っているのだろうか。次章では、経済開発前後での若者の職業選択の違いを概観し、現在の若者の具体的な職業選択についていくつかの事例を紹介したい。

4. 若者の生業への参加

ゴン・バライの若者は、どのようにして職業を選択し、経済活動に参入していくのだろうか。ゴン・バライにとどまり、村の中で経済活動に参入しようとする、前述の漁業、または農業がその主たるものとなる。漁業にコミットメントする場合には、巻網の乗組員になるか、船と船外機を購入して釣り漁やエビ刺網漁を開始することになる。また、農業に参入する場合には、土地を購入あるいは賃借し作物を植え付けるか、ゴム園に雇われて樹液の採取をすることになる。いずれも、父親の後を継ぐことにより、初期投資を回避することも可能だが、兄弟が多いのですべての若者が後継者となることは難しい。ただし、タバコ栽培の場合には、政府への申請時に後継者を指定しなければならないので、指定された息子が後を継ぐことになる。

前述のように、1980年代後半からマレーシアはまれにみる経済成長をとげている。その過程で、若者向けの様々な雇用機会が創出され、若者の職業選択の幅も広がっている。ここでは、まず、経済成長以前の若者の典型的な経済活動への参入の例をあげ、次に現在の若者の職業選択の実情を、事例をあげながら紹介し、そこに見られる特徴について考察する。

1) 経済成長以前

1980年代後半に経済成長が始まる前のゴン・バライの若者の経済活動への参入は、まず漁業に従事することから始められることが多かった。農業はほとんどが世帯ごとの経営なので、後継者のみが親の手伝いをする程度

であり、また、ゴムの樹液採取は雇用関係が固定され、毎日作業にあたらなくてはならず、独身で気ままな暮らしを求める若者には不向きであった。

漁業へ参入する際には、はじめから船と船外機を購入し独立して釣り漁やエビ刺網漁に従事することはきわめてまれで、通常は大規模な漁業の乗組員として働くことが多かった。ただし、ゴン・バライにはこのような漁業は巻網漁しかなく、しかも、通年にわたり操業されているわけではないので、巻網漁が休業される 11～3 月まではドゥングンやクァンタンなど、大きな港のある町でトロール船に乗り込み、4～10 月にゴン・バライに戻り、巻網船で働くというパターンをとっていた。前述のように、ゴン・バライの巻網漁はその操業組織がかなり柔軟に運用されていた。その日ごとに参加・不参加を決定できるため、漁業以外の仕事、例えば建設業などとの組み合わせも可能であり、若者のライフスタイルにも合っていた。若者は、巻網漁である程度の収入を確保しながら、他の職業への転職も視野に入れて経済活動に参入していったのである。

ところが、1980 年代後半からマレーシアの経済が急激な成長を見せ始め、また、1990 年代に入ってから、2020 年までに先進国に追いつくというスローガン「2020」が宣伝されるようになり、若者の職業選択は大きく変わっていった。経済開発は、クアラルンプールとその近郊に限定されず、豊富で安価な労働力を求め、地方にも波及していった。ゴン・バライの北およそ 20 km に自動車部品製造工場が建設され工員をバスで送迎したため、多くの若者が雇用された。また、トレンガヌ州近海の大陸棚で原油と天然ガスが開発されるにつれ、多くの工場が建設されて雇用機会が増大していった。こうした中、巻網漁の網主は、自身の病気のせいもあり、巻網漁から撤退し農業専業へと経営方針を変えていった。そのため、ゴン・バライの若者の職業選択のあり方は大きく変わるようになった。

2) 現在の若者

1990 年代に入ってから、巻網漁が撤退し、ゴン・バライでの柔軟な雇用機会がなくなった一方で、クアラルンプールやその近郊の首都圏からの

求人や、トレンガヌ州内の求人が増加した。また、経済開発に伴い工場や労働者用住宅の建設が進み、土木や建築の需要も増大した。こうした中、ゴン・バライから数名の若者がクアラルンプールやその近郊へ職を求めて出て行った。ただし、これらの雇用機会はいわゆる定職ではなく、期間を限定した日給月給での雇用であり、流動性はきわめて高いといえる。また、ゴン・バライの若者にとって好都合だったのは、村から南へおよそ 60 km にあるクルテ (*Kerteh*) や 100 km 南のクママン (*Kemaman*) に、マレーシア有数の石油化学コンビナートが建設されたことである。これらの工場で働いたり、その建設にたずさわることで、村からそれほど遠ざかることなく、新たな雇用機会を利用することが可能になったのである。村から毎日通勤することは出来ないにしても、週末(トレンガヌ州は金曜日が休日)には村に帰り、金曜日には村のモスクで礼拝をすることは出来た。

ところが、1998 年あたりから、マレーシアの経済成長にかげりが見えはじめた。ゴン・バライの北約 20 km にあった自動車部品工場は操業が停止され、そこで働いていた多くの若者は、失業の憂き目を見ることになった。また、首都圏からの求人も減少し、村へ戻る者も相次いだ。

ゴンバライ出身の若者が、1980 年代後半からの経済成長とその後の経済停滞のなかで、実際にどこでどのような職業につき、どのような変遷を経たのかを知るため、その居住地と職種を調べてみた。具体的には、1992 年に 12~30 歳であったゴン・バライで生まれた男性 86 人、女性 60 人を対象にし、1995 年と 1998 年にどこに居住し何をしていたかを調査した。表 8 は、3 年ごとの職種の変遷とゴン・バライに居住していたかどうかをまとめたものである。ここで、定職とは公務員や会社員など、恒常的に雇用され定期的に収入を得ていた者のことである。この表から、以下の 2 点の特徴が浮かび上がる。まず、農業や漁業など第一次産業に従事しているものを除くと、どの時点でも定職につくものより、期間工など、一定の雇用期間の契約に基づいて働くものが多い点である。このことは、ゴン・バライの若者が参入した経済活動が、マレーシアの経済成長によって新たに創出された不安定なものであることを意味していよう。次に、ゴン・バライに

表 8 ゴンバライ出身者の職業選択の変遷

職業名等		男		女	
		ゴンバライ 居住者	転出者	ゴンバライ 居住者	転出者
農／漁業	'92	16	2		
	'95	10	2		
	'98	15	2	2	
定職	'92	3	12	4	5
	'95	3	16	5	5
	'98	4	21	6	8
期間工／大工等	'92	3	11	4	5
	'95	10	25	3	7
	'98	4	20		6
失業	'92	3			
	'95	2			
	'98	3			
学生 (含職業訓練)	'92	23	13	18	3
	'95	12	6	12	4
	'98	5	7	3	6
主婦／家事手伝	'92			12	8
	'95			12	11
	'98			12	16
不明／その他	'92			1	
	'95			1	
	'98		5	1	
合計	'92	48	38	39	21
	'95	37	49	33	27
	'98	31	55	24	36
		86		60	

居住しての農・漁業が 1995 年には減少したものの、1998 年になって増加傾向をみせていることである。これは、経済が停滞し雇用機会が減少したために、村に戻ってゴン・バライで経済活動に従事するものが増えたことを意味しよう。

表 9 は、1992 年から 3 年ごとの居住地の変化をまとめたものである。

1992年には男女とも半数以上の若者がゴン・バライに留まっていたのに対し、その数は徐々に減少し、1998年には約3分の1しか残らなくなっている。また、1995年にはトレンガヌ州以外の場所に居住する者が3分の1強を占めたが、1998年にはその数は減少し、トレンガヌ州内へ回帰する傾向が見られる。つまり、経済の停滞にともない、村に帰ってくるわけではないものの、生地近くに居住する者が増えたのである。表10は、定職以外の職についていた者について、転職の有無を調べたものである。これを見ると、男女合わせて約半数の者が転職していることがわかる。

表9 ゴンバライ村出身者の居住地

居住地	男			女		
	'92	'95	'98	'92	'95	'98
ゴンバライ	48	37	31	39	33	24
クアラトレンガヌ市	8	6	10	4	2	2
クルテ／クママン	5	9	11	5	5	5
その他のトレンガヌ州	2	5	7	4	4	6
KL／スランゴール	8	12	9	2	6	10
クランタン／パハン	5	7	2	1	2	3
ジョホール／ヌゲリスンビラン	4	5	4	2	1	3
ペラ／ペルリス／ペナン／クダ	3	0	5	2	5	6
東マレーシア	1	2	2	0	0	0
国外	2	1	0	0	0	0
不明	0	2	5	1	2	1
合計	86	86	86	60	60	60

表10 転職経験の有無

	男	女
有	33	10
無	36	6
合計	69	16

3）事 例

以下では、これらの傾向を具体的に把握するため、3つの事例をあげて経済活動への参入と職業の変遷について考える。

〈事例1：1970年生まれ、男性〉

1988年にクアラトレンガヌの近くで漁船の乗組員となる。月収は800リングット。仕事がきついため約2年で船を降り、1990年から2年間、クアラルンプールの職業訓練養成所で機械工の技術を習得する。1992年からはクママンで工場の管理会社に勤め月に750リングットを受け取るが、専門家を雇うために解雇される。1993年にはジョホール・バルでシャッター屋に勤める。歩合給で1ヶ月に約1,000リングットの収入があったが、会社が倒産して失業する。1994年にゴン・バライに帰り、大工仕事と親の手伝いで農業に従事する。また、その途中、3ヶ月ほど村内で簡易食堂を開くが、経営不振で廃業する。1995年には再びクアラルンプールへ出かけ、月収900リングットでボーリング工として働くが、親方と意見が合わず退職する。1996年にはクルテの海底油田の海上基地の従業員にヘリコプターで食事を運ぶケータリング会社に雇用される。2週ごとの給料は600リングット。仕事は面白く順調だったが、社長がカラオケなどで会社の金を浪費し倒産したため失業する。1998年にゴン・バライに帰り、大工として働く。この時の日給は30リングットである。また、夜は村の簡易食堂のコックとして雇われる。同年9月に親戚とクママンで食堂経営をはじめめる。2000年には食堂の経営が行き詰まり、ゴン・バライに帰り、現在は村の近くの国有林の植林の請負をしている。

この男性は、機械工としての訓練は受けているものの、それにこだわらず様々な職業を転々としている。ただし、いずれもそれほど熟練を要しないもののばかりであり、いわば不安定な雇用機会であることがわかる。また、勤務した会社や店が倒産することも多く、急激な経済成長の中で、雇用主の側にもとまどいがあることがうかがわれる。さらに、クアラルンプールやジョホール・バルなど村から遠く離れた大都市圏に職を求める一方で、

行き詰まったらゴン・バライに帰るという傾向に注目したい。

〈事例2：1965年生まれ，男性〉

1985年にクアラトレンガヌの近くで巻網の乗組員となる。この時は月給制で1ヶ月500リンギットを受け取っていた。1985年にはクアラトレンガヌ近郊で大工として働く。月給は500リンギット。1990年にクアラトレンガヌの職業訓練所で2年間、一般機械工の技術を習得する。1992年に首都圏スランゴール州の台湾系の工場で働く。月給は580リンギット。給料が安く、金曜が休日でないためモスクでの礼拝が出来ず1年で退職する。1993年にゴン・バライに戻り、求職活動を続けながら農業の手伝いを行う。1996年にクルテで溶接工として雇われる。比較的熟練を要する職種なので、月給は2,000リンギットと高給である。定職として雇われているのではないが、契約工ながら現在もクルテで溶接工として働き、木曜日に仕事が終わるとゴン・バライに帰り、金曜日に村のモスクの礼拝に参加するという生活を続けている。

敬虔なイスラム教徒であるゴン・バライの若者にとって、金曜日に集団礼拝ができるかどうか、職業選択の重要な要因になっている。マレー人系住民の多いクランタン、トレンガヌ、パハンなどの州は金曜日が休日になっているが、クアラルンプールやスランゴール州、ジョホール州などは日曜日が休日で、金曜日の集団礼拝がままならないことが多いのである。また、この男性も、現在の職業につくまでおよそ3年間、ゴン・バライに戻り、農業の手伝いをしながら求職活動をしていたことに注目したい。

〈事例3：1965年生まれ，男性〉

1978年から父親の手伝いで一本釣りや農業に従事する。1990年頃から土管工としてクルテやドゥングンなどで働いている。現在の日給は35リンギットで、契約で数日間働きある程度のお金を稼ぐと、仕事をやめ村に帰ってくる。そして、お金がなくなるまで村やクアラトレンガヌに出かけて友人等と過ごしている。お金が尽きると再び仕事を求め、土管工として働く

というパターンを繰り返している。

土管工としての仕事はきついけれど、日給はそれほど悪くはない。まじめに仕事を続ければ、ある程度ゆとりのある生活をすることは可能だと思うが、この男性の場合はあくせく働くことが嫌いで、必要最低限の収入があればよいという考えである。働かずに村にいるときに、彼にとってもっとも心休まる時なのかもしれない。

5. 考 察

これまで、ゴン・バライの生業を概観し、マレーシア経済の高度成長のなかでのゴン・バライの若者の、居住地や職業選択の変遷をたどり、事例をあげながらその経済活動への参入について紹介してきた。彼等の職業選択については、次の2つの特徴をあげることができよう。1つは、村を離れて経済活動へ参入する際に近隣地域を選ぶ傾向があること、2つ目は、転職経験の多さと村との結びつきの強さである。

まず、村を離れての職業選択の際に、遠くの大都市圏よりもゴン・バライの近郊、トレンガヌ州内を選ぶ傾向があることについて考えてみる。クアラランプールなどの大都市圏の方が給料は高いが、生活費も高く割高感がある。とくに食費は2倍もかかり、日々の食事のほとんどを外食に頼る若者にはかなりの出費を強いることになる。また、大都市圏の多くが日曜日を休日としており、金曜日のモスクでの集団礼拝時間が保証されないことも、トレンガヌ州にとどまろうという選択に影響を与えていよう。さらに、州内のクルテやクママンに雇用機会が確保されているという事情も大きい。

次に、若者の多くが転職を繰り返し、行き詰まったらゴン・バライに戻ってくるということも注目に値する。村に帰れば親が従事している農業や漁業を手伝い、何とか生活ができるのである。さらに、かつて柔軟な雇用機会を提供していた巻網漁は終了したものの、トラックでゴムやアブラヤシを輸送するなど、村内でちょっとした仕事を見つけるのはそれほど難しく

はない。ただし、これらの仕事はそれほど豊かな収入源とはなりえない。独身者が1人で生活する場合の小遣い程度にはなるが、結婚し所帯をかまえるにはほど遠い収入しかもたらさない。若者は村に帰り、しばらくこうした仕事でしのぎながら、次の職業を探していくのである。

マレーシアの経済成長は1998年からかげりを見せはじめた。若者を取り巻く状況はけっして明るいものではない。しかし、ゴン・バライの若者をみていると、不況下の日本の若者の職業選択の際の悲壮感は感じられない。村でぶらぶらしながら仕事を探しているときですら、明るさはけっして失ってはいない。生まれ故郷で家族や友人とともに生活することを楽しんでいるように思われる。

1980年代後半からのマレーシアの経済成長は、1960年代の日本の高度経済成長と比較されることがあるが、ゴン・バライの若者の暮らしを見てみると、大きく異なっている点が目につく。それは、日本の高度経済成長期には、家族をあげて、村をあげて都会に出て行くという傾向があったが(suda, *et.al.*, 1988)、マレーシアでは都会に出て行った若者も、何かあれば村に戻ってくるという点である。VaydaとMacCay(1975)は環境の危機的状況への対応の際に社会や個人が有している柔軟性に着目した。政府や大企業が主導するおおがかりな経済開発に直面し、マレーシアの多くの村々は急激な社会変化に直面している。しかし、少なくともゴン・バライにおいては、経済開発にのみこまれ村が解体していく兆しは今のところあらわれてはいない。このことは、ゴン・バライが経済開発に対処しうるだけの柔軟性を有していることを示すものと考えられるのではなかろうか。マレー半島東海岸はマレー人のふるさとといわれることもあるが、イスラム教への帰依とカンポンへの愛着は、経済成長が進んでも、いまだ消え去ることはないであろう。

謝 辞

本研究は、科学研究費『熱帯アジア・西南太平洋地域における水産資源

利用の文化適応とその戦略』（海外学術，平成2年度－4年度，代表者秋道智彌），および『東南アジアの湿地帯における資源と開発－開発と保全の生態史的研究』（海外学術，平成10年度－12年度，代表者秋道智彌）の補助を受けておこなった。研究代表者の秋道智彌氏（国立民族学博物館）には，本研究の機会を与えていただき，終始ご指導を賜った。共同研究者の口蔵幸雄氏（岐阜大学），後藤明氏（同志社女子大学），田和正孝氏（関西学院大学），山尾政博氏（広島大学），野中健一氏（三重大学）には調査期間を通じて公私にわたりお世話になった。また，大西秀之氏（北海学園大学）には草稿の段階から貴重なコメントをいただいた。皆様に心よりお礼申し上げます。最後に，愚かな質問や振る舞いにもかかわらず，こころよく筆者を受け入れてくださったハリム・ビン・アリフィン氏をはじめとするゴン・バライ村の皆様に，衷心より厚くお礼申し上げます。

引用文献

- Bennett, J. W. (1969) *Northern Plainsmen: Adaptive Strategy and Agrarian life*, Aldine, Chicago.
- Lees, S. H. and D. G. Bates (1990) "The Ecology of Cumulative Change" in Moran, E. F. (ed) *The Ecosystem Approach in Anthropology*: 247-279, Ann Arbor, The University of Michigan Press.
- 藤巻正己（2000）「クアラルンプル大都市地域における外国系スコッター・カンボン」『立命館地理学』12号：19-42.
- 生田真人，松澤俊雄編（2000）『アジアの大都市 [3] クアラルンプル・シンガポール』日本評論社
- Moji, K. and H. Koyama (1985) "A Time-saving Spot-check Method applied to a Sundanese Peasant Community in West Java" *Man and Culture in Oceania*, 1: 121-127.
- Suda, K. (1994) "Methods and Problems in Time Allocation Studies" *Anthropological Science*, 102: 13-22.
- Suda, K., Ohtsuka, R. and T. Nishida (1988) "Decrease of Households in a Rural Community of Japan in Relation to Demographic and Occupational Change" *Journal of Human Ergology*, 17: 139-150.

- 須田一弘(1995)「生態と社会変化」秋道智彌他編 『生態人類学を学ぶ人のために』世界思想社：217-237.
- Vayda, A. P. and B. J. McCay (1975) “New Directions in Ecology and Ecological Anthropology” *Annual Review of Anthropology*, 4: 293-306.